

いという潜在的な関心もあったにせよ、他方で職業安定法等に公式に目的規定されるとおり、労働市場の機能を維持・向上させるという本来の「意図」も無視すべきではない。行政の介入原理は、労働市場で適切に職業を見つけることがより困難な求職者に対してより多くの支援を行うというものである。そうであれば、「学校」という政策手段を介して市場の整備を進めていくことは、政策官庁として歩もうとしてきた職業安定行政中央の立場からみると、きわめて本来的・当然のことであり高校に職業斡旋のパワーが形成されることはむしろ「政策の成功事例」として記述されるべきではないか。それをあえて「行政野心の敗北」として論じる6章の観点は、ユニークではあるがきわめて限定的・一面的といわざるを得ない。

逆に、「日本的移行システム」の特質を解明するためには、先の OECD (2000) でも「包含性」において問題があると指摘されている点であるが、労働行政が「学卒者」にこだわり続けてきた結果として、「保護」という理念において制度確立に「失敗」している領域、つまり高校中退者や一般若年者の職業紹介に関する関わり方の議論をすべきだったのではないか。結論で指摘されている現代的な課題に繋がることを論じることがほんとうに本書の「意図」であったのなら、それこそ不可欠の章だったのではないだろうか。ともあれ、本書が、今後の重要な研究課題を数々明らかにしたという意味で、高く評価されることは間違いない。ぜひご一読をお勧めしたい。

◆ A 5 判 304頁 本体6,000円
東京大学出版会 2000年2月刊

■ 書 評 ■

神田道子・女子教育問題研究会 [編]

『女子学生の職業意識』

関西福祉大学 吉原 恵子

1

「教育年数の平等化は職業の平等化にどのように影響するのか」が本書の出発点となる問いである。具体的には女子学生の就職にかかわる意識やキャリアパターンの選択などを中心に現状の分析が行われている。また、それらの意識を生み出す背景要因として家庭や学校におけるジェンダー文化との関連性が検討されている。

学歴主義研究においても「教育の平等が社会における然るべき地位や処遇を保証しうるかどうか」について見てきたが、その対象である男性（男子学生）が職業達成自体にどのようにコミットしているかは問われず、「男性なら仕事に就きたい」のは当然であるとされてきた。女子高等教育研究になると「そもそも女子が教育（学歴）を利用して職業達成しようとしているのか」というところから

始めることになる。

ここには現実社会を受けて、「女子には女子に特有の問題がある」との構成図式にはまってしまう落とし穴がある。

2

本書では「課題意識」として、「平等化の大きな流れを作るには、多数を占める女子学生の動向が重要であり、彼女らが女性問題に気づき意識の革新性をもって職場に入り行動していくことが労働場の改革につながる」ということが挙げられている。ここでは、これまで女性の社会的地位向上に貢献してきた「エリート女性（女子学生）」に対応するかたちで「多数を占める女子学生」が措定されている。

これは（女子教育問題研究会のメンバーで出された『新・現代女子の意識と生活』1992、日本放送出版協会では、「これからの女性の生き方」として予想された「職業と家庭と社会活動の鼎立」）が、10年近くを経てそれが女性全体に広がっていないことを受けてのことである。現状を受け、どう打開していくのか。

本書では、放っておいてもキャリア・アップをめざし生涯にわたって職業継続をめざす女性はさておき、平等化を加速させるには「そうではない女性」をどうにかしなければならない、との焦燥感が感じ取れる。

「女性は一枚岩ではない」という研究上のイントラ・ジェンダー的視点が現実社会の平等問題図式に吸収されてしまっている様子がうかがわれる。

3

第1章は、「高等教育と女性の職業」研究についてレビューされているが、研究関心は「教育」にではなく「女性」そのものに向けられている。ここでは「なぜ女子は大学へ行くのか」という視点は希薄である。

本書では、「女性の生き方との関係で職業がどのようにとらえられてきたか」に焦点が当てられている。また、全体に、近代社会における効率性、合理性重視の働き方に対する異議申し立てがなされており、女性、なかでも高学歴女性には社会変革をもたらすキーパーソンとしての役割が期待されている。

それでは男性はどこに向かうのか。ジェンダー研究者でなくても湧いてくる素朴な疑問であろう。また、同時に産業構造や雇用環境が激しく変化する時代にあって、どのような職業やキャリア形成を志向することが社会全体の男女平等化につながるのだろうか。

平等を議論の俎上にのせるには、まずその中身が検討されなければならない。

4

教育から労働へと向かう中で、職業意識の形成と性別分化はどのようにして起こるのか。本書では家庭・学校のジェンダー文化による社会化仮説と職場機会仮説が設定され、変数間の因果関係は特定されないものの概ね仮説は検証された。結局、教育年数の問題に先立って、まず女子学生がどのような文化のもとに育ちどのような大学文化に身を置いているのかということが職業意識やキャリアパターンの選択を決定しているということ

になる。書の大半は「女子の家庭背景と学生文化における性別分化」に焦点が当てられている、ひとつの「社会化研究」ということになるだろうか。

また、高学歴女性のなかでもどの女性が職業を継続し、どの女性が労働の場から去るのかについてはたとえば、「三歳児神話」の影響、モデル・逆モデルとしての母親の存在、上司の理解など多数の要因がかかわっていることが明らかにされた。高学歴女性の現在を知り、今後どのように彼女らを導いていくことが職業継続に結びついていくのかという点に関しては、詳細に検討された。

しかし、これはないものねだりかもしれないが、「教育社会学的視点」からアプローチするなら、高等教育システム全体のなかでの女子学生の位置やそれに付随する役割がどうなっているか、いわゆる社会的カテゴリーとしての「高学歴女性」（そのようなラベルが現在も流通しているとすればの話だが）が労働システムの中でどのように配分されているのかといった俯瞰図もいくらか示してほしかった。また、高等教育研究の中でまだ手薄い、社会化環境としての「大学」という視点からも分析が進められることを期待したい。

5

本書では「性別役割分業が正当性をもつ状況のもとでは職業継続型は特異なパターンであり、脱性別分業的性格をもっている」ので「女性のキャリアパターン

を男性とは別に設定する」としている。はたして「女と男は違うのだ」ということを踏み台にして、高学歴女性は「男並みの働き方」を一足とびに跳び越し、「新しい働き方」に向かっていくのだろうか。

また、本書では「職業と家庭はどちらも大切であり、それゆえに職業意識のあり方が問題になる」という立場に立っている。職業と家庭が相反するものではなく、どちらの領域においても自己を投入できるという考え方が支配的になるためには、「女子学生」よりも先に「社会」や「産業構造」が変わらねばならないのかもしれない。

ジェンダー研究では、女性（男性）を男性（女性）とのかかわりのなかで捉える視点は未だ確立されていないように思われる。確かに、『「女と男の関係性」によって社会を読み解く』には実際のところ方法論上の多くの困難を伴う。先にも触れたように、「女性」をひとまとめに扱ってきたことの反省から、「女性は一枚岩ではない」との視点が登場したが、平等の視点を導入したとたんに「女性の問題」に逆戻りしてしまう。このような女性学やジェンダー研究者がはまってしまふ罠からのがれるには、女性を語りながら同時にもっと多くの男性を登場させなければならないのであろう。

◆A 5判 300頁 本体5,000円
勁草書房 2000年10月刊